【原宿災害・事件簿】

○九月十二日の夜九つ時、出火、西六軒町残らず焼失。火元は茂平次。

○富士山が大噴火したのは、十一月二十三日で、十二月八日ころには鎮まった。この大噴火には予兆があった。「土屋家文書」に記すところ、左のとおりである。

「宝永四年丁亥十月四日の昼八つ時未の刻に大地震。同五日の朝卯の下刻に、また揺り夥しきことなり。三十日、四五十日の間、少々ずつ毎日揺るなり。別けて、吉原宿大地震、町中残らず家潰れる。ならびに神原、由井、興津、江尻、府中宿、そのほか、上方への宿々潰れ家あり。別けて、大坂大地震、その上大浪上がり、老若男女の人々、死ぬる事数万人、夥しきことと聞く。さて、甲州河内大地震、別けて、うつぶさ、白鳥山壊し、富士川東へとび、長貫村埋まり、死人大分。これによつて、富士川舟渡し場に水一円之れ無く、飛脚の者、歩行にて渡る由伝え聞く」。

遠方のことは風聞であって、どの程度まで事実か分からないが、あい続く地震で人々が不安になっているさまがうかがえる。十一月の富士山大噴火について、「土屋家文書」はつぎのように記している。

「同年十一月二十二日夜九ツ時分に、地震揺り、また七ツ時、また二十三日に度々揺り、昼九ツ午の上刻に、富士山東のひら樹立、けなしの境と見え、里はばんちやく雲夥しく湧き出で、雷の如く大いに鳴り響き、諸人これを見て、何事かと不審なり。世の滅ぶる相かと、老若男女、肝を消し驚き入る。さて、晩方より大火上がる。火見ゆること、御山一倍高し。夜の九つより二十四日の朝まで、いよいよ鳴り強く、大雷のごとく夥しく大地に響き、家動き、戸はめ鳴りわたり、すさまじき事。二十四日の晩五ツ時、八ツ時、両度地震揺り。

さて、諸国の様子伝え聞くに、隣国は申すに及ばず、遠国まで、御山の鳴る音聞えそうろうと伝え聞く。さて、御厨、そのほか、相模国へ御山の焼砂を降らすこと大雨の如し。別けて、御厨も籠坂より御殿の間、石砂降り、八尺九尺積り、富士山の御神火にて、御厨のうち須走村焼失し、以上三十人ほど死人有り。火のごとくなる大石砂、雨のごとく降るさまなる。これに依つて、田畑六万石ほど荒になる。さて、不審なることは、風吹かざる時も、またならひ風吹きそうろう時も、富士山の焼雲、東箱根山の方へ行く。西の風吹けば、なお行く。昼は黒き雲、夜は雲火炎ひかり、物音は大雷のごとく、この音、下総上総国までも聞こゆ。江戸にては、二三日の間、昼夜の隔てなく、行灯挑灯をとぼし、西は美濃尾張の国へ聞こえそうろうと伝え聞く。

然るに、駿河国、別けて、原宿吉原町は御山近所にそうらえども、何事も無く、極月八日の夜明け、九日朝七ツ過ぎに、御山大いに鳴りわたり、焼け納まる。以上十六日目なり。富士山東の方に小山出づる、則ち御山の形也。天下大平、国土安穏、諸人遊楽、目出たし目出たし。歌にいわく、お富士山、いつの間にやら、火がとまり、小富士もうけて、民のよろこび」。

英岩寺の長首座の噂を聞いて、越後へ

慧極会下の長首座が徳源寺に掛錫したので、均首座および隆、英の二人とともに法味を受けた。慧鶴も時々行って扣問したが、さほどにも思わなかった。［隆は定岩と号す（紹岩玄隆）。常陸の福泉寺に住した。英は川邑と号す。甲州の南松寺に住した（川邑智英）。］

【この一段は、『草稿』『年譜』ともに誤りである。ともに慧極下の長首座が徳源寺に掛錫したというが、そ

うではない。『策進幼稚物語』上四七丁オではつぎのように記す。「時に隣刹に越の隆上座なる者有り。予と同年なり。一見して旧相識の如し。熟話のついで、隆が言に云く、越の英岩に主張首座なる者有り。是れ旧参の上士にして、曹洞黄檗林才下の諸尊宿、到る所に皆な尽く称名（証明）印可すと。実に真正見道得力の上士なりと。予聞き得て、切りに此の道人を見まく欲す」。また『壁生草』上一八丁オでは、「時に越後に道人あり、恵極和尚印可の人なることを聞き、英岩の眼目会に事寄せ、翌る春、同行三人を促し、越後英岩の輪下に到る」と記し、また、一九丁に「長首座は初め尋ねし道人なり」とある。

つまり『草稿』『年譜』にいう「長首座」は「越の隆上座」の誤りである。長首座とは、それを目当てに英岩寺まで尋ねて行った人のことである。したがって、『年譜』に「師も亦た往いて之を扣く。而れども意に可ならず」というのは、「わざわざ越後まで行って長首座に会ったがさほどにない人物であった」ということである。次年度の章を参照。

正しいところを記せば、以下のようになる。「この年末、隣刹の徳源寺に越後から紹岩玄隆という男がやって来ていた。慧鶴と同年だったので馬があい、よもやま話を聞いているうちに、越後の英岩寺に主張首座という者がいて、なかなかの人物だという。これを聞いて、ぜひとも会ってみたいと思った」。】

宝永戊子五年（一七〇八）二十四歳

松蔭寺・越後高田英岩寺・飯山正受庵・松本慧光院・正受庵・帰郷

越後高田英岩寺へ出発

この春、道友とともに越後高田の英岩寺に行き、生鉄素崙和尚（?～一七二八）の『人天眼目』の講筵に預かった。慧鶴はいよいよ道心をもってとりくんだ。

【『草稿』には「夏満ちて、長及び諸友と倶に越後高田の英岩に至り」とあるが、「長」の部分だけが朱線で消されている。『年譜』はそれを見落としたのであろう。『年譜』によれば、前年から徳源寺に来ていた長首座とともに越後に行った、ということになるが、諸本と照合すれば齟齬があり矛盾がある。『壁生草』には、「時に越後に道人あり、恵極和尚印可の人なることを聞き、英岩の眼目会に事寄せ、（以上は前年度のこと）翌る春、同行三人を促し、越後英岩の輪下に到る。先ず相尋ねて彼の道人に逢う。熟談して精しく彼の見識を見るに、聞き及べる程の透関の人にも非ず」とある。また、『八重律』巻之三に言うところは、「時に隣刹（徳源寺）に越の隆上座なる者有り。予と同年なり。……熟話のついで、隆が言に云く、越の英岩に主張首座なる者有り」である。

前年の条で述べたように、正しくは以下のとおりである。「前年末、隣刹の徳源寺に越後からやって来て滞在していた紹岩玄隆という男から、越後の英岩寺に主張首座という者がいて、なかなかの人物だと聞いて、ぜひとも会ってみたいと思っていた。そこで、この春に出立した」と。

『草稿』『年譜』ともに「性徹」と記すが、正しくは生鉄である。生鉄素崙。】

二月、英岩寺での苦修行

英岩寺の後に、開基である越後高田藩主戸田忠真のお霊屋があった。講席のないときには、ここで坐禅をした。『禅関策進』を師として日夜研究すること累日、ときには寝食を廃して坐った。講席に出ても、講義の声は耳に入らず、食堂に行って食事を受け取っても、それが眼に入らない。人を見ても陽焔が浮かんだように見える。自分の体は雲の中に浮かんでいるようであった。まるで水晶世界にあるようで、森羅万象のいっさいが透明で一点の翳もないようであった。慧鶴は、このように現われて来た境に執着することなく、なおも精神を奮起して、現われる境界にとらわれず、単々と重荷を荷って嶮しい嶺に登るように、参じていた話頭を拈提し、いついかなる時も、何をするときも、一つの異念もまじえずに工夫をつづけ、前後十数日を経た。二月始めから十六日の夜に至った。

【『策進幼稚物語』上四八丁ウではつぎのようにいう。「ここにおいて、大憤志を発起し、大誓心を抽んで、万縁を放下し、独り竊(ひそ)かに戸田侯の霊屋の地面、全体塊石を布きならべたる中に窟(かく)れて、竊かに死坐する者累日、痴々呆々(ちちがいがい)、理尽き詞窮(ことばきわ)まつて技もまた窮まる。平生の心意識情すべて行なわれず。万仞の層氷裏に在るが如く、一枚の瑠璃瓶裏に坐するが如く、気息も亦た絶へなんとす」。また『壁生草』上一八丁オでは、「殿の玉屋の内に隠れて、誓つて七日断食接心す。寺中、此の趣向を知るもの無し」とする。】

遠寺の鐘声を聞いて大悟

ある夜、お霊屋で坐禅して、恍惚としているうちに明け方になった。そのとき、遠くの寺の鐘

の音が聞こえて来た。かすかな音が耳に入ったとき、たちまち根塵が徹底的に剥げ落ちた。さながら耳元で大きな鐘を撃ったようである。ここにおいて、豁然として大悟して、大声で叫んだ、「わっはっはっ。岩頭和尚はまめ息災であったわやい。岩頭和尚はまめ息災であったわやい」と。すぐに走って生鉄和尚に相見して、所見を呈した。和尚の対応が俊敏ではなかったので、慧鶴は和尚を平手打ちして室内を出た。そのあと、仏灯和尚や長首座に会って、所見を述べたが、いずれも、機語が契わないので、払袖して去った。

【仏灯は、生鉄素崙の弟子である仏灯素周(?～一七二六)である。
このときの大悟のことを、『策進幼稚物語』上四九丁オではつぎのように述べる。「奇なる哉、夜半たちまち遥かに鐘声を聞いて、忽然として大徹大悟、身心脱落、脱落身心、玉楼を吹倒し、氷盤を擲砕して、十方虚空なく、大地寸土無し。二十年来未だ曽て見ず、未だ曽て聞かざる底の大歓喜、覚えず高声に叫んで云く、『希有なる哉、岩頭老人依然として好在なり』と。手を拍して呵々大笑。同伴驚いて顛狂せりとす」。また『壁生草』上一八丁ウでは、「満ずる夜半、遥かに鐘声を聞きて、身心脱落、繊塵を絶す。歓喜に堪えず高声に叫ぶ、『岩頭老人猶お好在なり』と。同行、寮中に在つて聞き付け、走り来たり手を把つて互いに相悦ぶ」と。】

大慢心となる

これより、自分の体験した境地に大いに自信をもって、諸方の善知識を見下して、「三百年来、自分のように痛快に悟った者はいないであろう。天下に我が機鋒に対抗できる者は一人もおるま

い」と思うようになった。

【このころ、修行仲間の中に跋上座という増上慢の修行者がいた。『荊叢毒藥』『四三一』「梵治に授与する法語」にいう、「私が越後高田の英岩寺にいたときのことである、尾張の跋上座という高慢ちきがいた。諸方の老師を敬称なしの二字で呼び、同輩などはみな一字で呼び捨てにする。そして批判を始めたら、誰もかなわぬ。私はひそかに、こういう男は、いずれきっと失敗するだろう、と思ったものである」。この跋上座の落ちぶれた姿を、のちに岩瀧山で見ることになる。このつづきは、三十一歳の条を参照。慧鶴は「こういう男は、いずれきっと失敗する」と思ったというのであるが、この時点における彼自身の大慢心とどう関わるのであろう。】

信州正受庵の宗覚が来参する

そのころ、一人の僧がやって来て、掛錫を求めた。冷厳な顔つき、その視線も尋常ではない。英岩寺の役位の者たちはみな、これは胆のすわった男だと思った。そのとき慧鶴は外堂（英岩寺以外の会場、久昌寺という）の参頭（引き手）であった。そこへ知客寮がこの男を連れて来たので、慧鶴は「諸君はならず者のような者がやって来れば、いつもわしに押し付けるが、ここは無頼漢のたまり場ではない。置くわけにはいかん」と言った。知客寮が言う、「貴公の腕力を見込んでお頼みするのだ」と。慧鶴は笑って、「ならば致し方あるまい」と。そこで男を知客寮が連れて来て会った。宗覚（宗格）という名だという。慧鶴が言う、「わしは駿河の鶴ソだ。性格が悪く人を責めるのが性だ。おまえさん、よろしくない行ないがあらば、ただちに追い出すぞ」と。男

は一礼をした。慧鶴は、下位の者に命じて掃除の係をさせた。

【『壁生草』上一九丁ウでは、やや詳しく述べられている。「かかるところへ一老、長首座、長首座は初め尋ねし道人なり、かの曲者を連れ来たり、ねんごろに告ぐ、『此の新到は、即ち信州の僧なり。寮の末席にさしおかれ、掃洒など仰せ付けられ、宜しく御指南、頼み入り候』と精しく仰せ入れらる。予が曰く、『如何なる御心にや侍る、房宿義碩（望宿耆碩＝古つわもの）六七人、隠れも無き衆寮破りの曲者、此の処は他派の借り客殿なれば、長しき者を択び遣わされて然るべきに、彼も亦た今の見掛は殊勝なれど、人貌見知りたらば大溢れ者ならん』。長の曰く、『御寺（あなたさま）見掛けて侍う』と。予が曰く、『然らば即ち点頭し申さん。さりながら伊に少しも怪しき働き在らば、早速常住へ返進申さん。その時違い無く請け取りたまうべきや』。『何がさて、それは少しも違い無き事』。ここにおいて万事相い済み互いに別かる」。『策進幼稚物語』上五五丁ウでは、さらに詳しく描かれている。「位頂長首座、彼の新到を召し具し来たって、念頃に申されしは、『今日の新到、信州の格上座、古寮も新寮も殊の外つまり侍り、御世話にはおわすべけれども、同寮を許され指南せさせ玉ひてよ』と念頃に申し入れられければ、取りあへず、『此の方も御覧の通り、殊の外相つまり侍り。他派の寺の客殿を借りて、大勢指し置かせ玉ふからに、御了簡おわして、随分綿密に、随分長しき参徒を選び遣わさるべき所に、さはおわさで、鵬末沙鷁（古つわもの）など云へる国々の衆寮破りの溢れ者ども、丁寧に撰び遣わし指し置かれたれば、昼夜に安き心も侍らず。さなきだに、此の頃、古寮あたりの評判には、この度の勝会は大略治まりては見ゆれど、久昌寺の外宿ばかりは心元なき者なり。諸国の衆寮破りの名高き不敵者どもを、撰りにゑつて五六人交へ置きたれば、やがて見玉へ、夏末に成りたらんには、必らず肝の冷へたる大事指し起こるべきぞと、額を攢むる人々も、まま之れ有る

由。兎に角にも、この義はひたすら御免蒙るべきにて侍り』と云ひも果てぬに、『さな宣(のたま)いそ。この義は、堂頭和尚も、御寺(あなたさま)を見かけて、初めより仰せ付けさせたまひたるにて侍り』。予が曰く、『御寺を見かけてとの御仰せ、ちかごろもつて痛み入り侍り。然らば即ち辞退し侍らんも恐れ多し。湯ともなれ水ともなれ、貴命に任せ申す可きぞ。さりながら、少しなりとも見届かぬ働きこれ有るにおいては、直下に追ひ出し、古寮へ返進致す可きが、その時違義なく請け取らせ玉ふべきや』。『何がさて、御気遣いこれ有るべからず』」。

右の記述によって、慧鶴が修行していたのは久昌寺だと分かる。英岩寺は戸田公の移封に伴い、元禄十四年(一七〇一)に下総佐倉から越後高田に移されたが、わずか九年余にして再び宇都宮に移封、宝永七年(一七一〇)英岩寺も同地に移された。高田の英岩寺跡は現在東本願寺高田別院となっている。曹洞宗の久昌寺は高田別院から二〇〇メートルほどのところにある。】

宗覚の見識

毎日、提唱が終わると、三四人の先輩がやって来て、慧鶴とともにその内容について意見を交わした。ある日、先輩たちが帰ったあと、その新しくやって来た男が、座から進み出て来た。慧鶴は「こやつ、訳のわからぬバカを抜かすか」と思っていると、男が言う、「さっきやって来た人たちは、久参の連中ではないか」。慧鶴、「久参ならばどうした」。「古則の公案について相談していたのか」。「そうだ。それがどうした」。すると男はきっとした顔つきで、「何がしの公案は、講師の解釈が錯まりで貴公の理解がよし。何がしの公案については、諸兄はみな錯まりで、講師

の見処はすこぶるよし、何々の公案については、みなそれぞれ一隻眼を失しておる」と、こう言うので、慧鶴はすっかり驚いてたずねた、「ではそなたの解釈はどうだ」と。すると男は一両則の公案についてその見解を述べた。それをつらつら聞くに、実に尋常ならざる解釈で、これまで聞いたこともないようなものであった。

【『壁生草』上二〇丁オにいう、「其の翌、開講宜しく相済み、皆々巡寮、祝義を演ぶ。長も亦た入り来たり祝義了つて、傍に在る眼目取つて推し開き、『此の所は堂頭の弁如何、彼は師兄の所見作麼(そも)』と、種々の詮議し了つて辞し去る。新到曰く、『彼は一老子(いちろうす)なりや』。予が曰く、『一老何の用事かある』。『此の人もまた少しく見処在り。さりながら此の処の判宜しからず』。予が曰く、『然らば此彼(ここかしこ)は如何』。彼、逐一判釈分明なり。同寮皆な尽く俄かに観(みもの)を改む。人々恐れ戦いて皆な静まりかえる」。】

宗覚から正受老人の名を聞く

慧鶴は、この男の解釈を素晴らしいと思い、ある時、その来歴をたずねた。すると、「自分は信州の道樹宗覚という者だ。飯山の田舎に正受老人という、愚堂国師の法孫がおられ、もっぱら向上の禅を提唱しておられる。じつに機鋒峭峻の方で、その厳しい指導を多年受けて来たのだ」という。慧鶴はその次第を聞いて、すぐにでも正受老人に相見したいと思った。すると宗覚が言った、「そうしたらいいだろう。そなたの器といい識見といい、老人の指導を受けるに堪えるだろう。だが、仲間と一緒に行ってはならぬ、貴公ひとりだけで行くほうがいい。老人はほんものの修行者だけを望んでおり、大勢が集まるのを嫌っておられるからだ」。